



## 立ち止まり、前へ進む

伊藤幸蔵 / いとう こうぞう  
米沢郷牧場グループ代表、一般社団法人BMW技術協会理事長

一年の間に私たちは変わったか？  
昨年3月11日の東日本大震災。直接被害の有無にかかわらずこの日、境に世の中が変わった、または変わらざるをえない状況だ。政治・経済、衣食住も含めあらゆる面にわたり、日本人の生存そのものを問いただすことが求められているように感じる。昨年11月には世界人口が70億人を超え、新興国を中心に人口増加は加速していく。加えて、地球環境の悪化、食生活の変化(肉食化)や投機取引、バイオエタノールなどの生産も食糧・穀物不足の大きな原因となり、依然として飢餓・格差が拡大している。一年の間に私たちは前進できたか？

活用し、国産飼料使用率約99%の鶏の生産実験を続け、バイオガスを利用もめざしているが、予定より進まない。焦りが募る。  
2010年、山形で開催されたBMW技術20周年記念の講演で安田喜憲先生が話された「日本人は世界で最後に武器をつくった」が思い出される。それだけ争う必要のない豊かな国だった。今はどうか。地域共同体が壊れ、「物」と「経済」ばかりが優先され、「豊かさ」が離れたように思う。目に見えない経済だけが暴走していく。今は立ち止まってもいいのではないか？  
目的と目標を混同しないでいたいと思う。同時に、目的により手段を選択していくことの確認をしていきたい。もう一度仲間と話し、想いを共有したい。地域、全国、世界の仲間と。  
そして前進。前進の目的(意思)を皆で共有し強く持つ。そして技術を進化(深化)させ、希望の持てる未来を育てていきたい。  
この文章を書いていて、親父が好きだった言葉思い出した。「立ち止まり、振り返り、また歩き出す、一筋の道」 浜田広介

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

### CONTENTS ■ HALINA 16 2012.05.01

- 02 Relay Essay ポコポコ⑬ 立ち止まり、前へ進む◎伊藤幸蔵
- 03 【特集】東ティモール 独立から10年 — 社会正義のためにたたかいつづける  
東ティモール・この10年間を振り返って◎エゴ・レモス  
独立から10年、今、私たちが感じていること。◎アレクサンドリーナ・テ・ロサ、ジュリオ・マテイラ、ペドロ・テ・オリベイラ
- 8 【Topics】  
外国人被災者の「現住所」◎佐藤信行  
上海で大混乱◎大橋成子
- 10 【Column】  
水俣と日本の今④ お茶に寄り添う◎原田利恵  
マイストーリー in ジャパン④ 【フィリピン】西本マルドニアさん  
仙人の雑誌・濫読④ ネズミ、ヘビ、ゴキブリ◎秋山真兄  
Have you ever seen the Cinema?⑩ 『ザ・コーヴ』◎重政栄一郎
- 12 撮っておきアジア⑬ タイ王国、バンコク◎平河夏
- 13 APLA生活⑬ ミトラティエ◎大村勘斗
- 14 【Voice from APLA partners】  
【ネグロスより】カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)3期生候補の「きびしい？」  
面接試験が終わりました！  
3.11 APLAの仲間もキャンドルナイト
- 15 事務局だより

### 表紙のことば

学生時代を彩るバンジャビ  
10年ほど前、母が訪れたインドのムンバイで買ってきてくれたバンジャビ。チュニックとゆったりしたパンツ、大判のスカートで1セットになります。  
3人姉妹で交互に着てね、と言われたものの私以外の姉妹が着ている姿を見たことはなく、もっぱらイギリス大学時代のハウスパーティー用でした。  
高校を卒業してから渡英した大学では、会う人会う人が友達になっていく。そしてみんなの国籍も様々で、毎日が刺激に溢れていました。パリ出身の友だちが私のバンジャビを喜んで着ていたのがとてもいい思い出です。彼女は今インドでアーティストとして活動しています。  
思い出す人たちは、あまりインドには関係ありませんが、あらゆる文化や友人に刺激を受けていた学生時代を象徴するような衣装です。(黒澤仁実)

## 特集

# 東ティモール 独立から10年

## 社会正義のためにたたかいつづける

東ティモール独立(主権回復)から10年経った。独立に命をかけてたたかっていた多くの人の夢は実現したのか。若者は未来を描くことができるようになったのか。老人は安心して死んでいけるようになったのか。学生、農民、そして独立運動の活動家に話を聞いた。そこから出てきたのは、経済政策の失敗、格差の拡大、劣悪なままの生活環境、という現実であった。この国の次の10年、難題への挑戦が続く。APLAも共に歩みたい。(編集部)



APLAと一緒に地域作りに取り組むFitun Caetano(フィトン・カイタノ)の皆さん。

## 東ティモール、この10年間を振り返って

エゴ・レモス / Ego Lemos  
ミニージャー

東ティモール民主共和国が独立(主権回復)してから10年が経つ。1999年9月に実施された「住民投票」によって24年間にわたり

東ティモールの民主共和国が独立(主権回復)してから10年が経つ。

1999年9月に実施された「住民投票」によって24年間にわたり

東ティモールの民主共和国が独立(主権回復)してから10年が経つ。

1999年9月に実施された「住民投票」によって24年間にわたり

を経て、2002年5月20日に正式に独立し、制憲議会選挙を経て、政府機構が形成された(その後も現在まで国連は駐留)。独立後、2002年〜07年はフレテリンが、07年〜12年は国会多数派連盟(AMP)が政権についてきた。

### 東ティモールの今

東ティモールは国土のほとんど

が山地。気候は、熱帯性で、雨季と乾季に分かれている。東ティモールの人口は約110万人(2012年)で、そのほとんどが農民だといわれている「農業国」だ。人口の85%が地方に暮らし、農業・漁業・森林に依拠して生活している。ほとんどすべての家族が自分たちの土地で様々な種類の作物・穀物、果物、野菜や家畜を育てている。しかし、政府歳入の99%は、石油収益金で、残りの1%のみがコーヒー産業、税金、観光業などによるものだ。

幹線道路や市場までのアクセスは、東ティモール各地で大きな課題になっている。国連ならびに国際機関は住民投票後から現在に至るまでの約12年間、二国間・多国間援助あわせて70億ドル以上を東ティモールに落としてきたが、そうした巨額のお金は、結局は東ティモールに留まらず、そもその資金源はどこか別の場所に流れていた。独立後の10年間で、フレテリンとAMPの両政権は、30億ドル以上を支出しているが、それも草の根の人びとへの経済的なインパクトにはつながらなかったといえる。そうした資金の9割以上

2011年11月にオープンした「ティモール・プラザ」は、東ティモールで初めてのショッピング・モール。



医療・保健衛生の現状も非常に大きな問題だ。人びとは土地でとれた季節のものを食べるよりも、輸入された加工食品(インスタント麺や缶詰など)を食べる傾向がある。Save the Children による子どもの栄養失調に関する報告書<sup>①</sup>・2012年では、東ティモールの5歳以下の子どもの54%が栄養不良による発育阻害であり、これは世界で3番目に悪い状況だという。

### よりよい未来のために

独立から10年が経った現在も、東ティモールの状況は厳しい。し

かし、解決策を見つけないのに、手遅れであることはないと思われている。ただし、物事の成り行きを見守って待っているだけではなく、政府、市民団体、地方自治体、そして人びととの強力な協働作業が必要だ。

私自身も、最善の貢献をしたいと常に努力している。その取り組みのひとつに、PERMASCOUT-TL<sup>②</sup>という団体の立ち上げがある。ポライスカウトとパーマカルチャー運動を合わせたものだ。団体の目的は、スカウト運動を通じて持続可能な発展を率いていく次世代を育てるため、パーマカルチャーの考えやシステムを広めることにある。モットーは、「地球、人、そして東ティモールの未来をケアする」だ。PERMASCOUT-TL<sup>③</sup>は、地方にいくつもの小グループがあり、将来的には、他の地域にもこうした小グループが生まれてくることを期待している。

この間、東ティモール各地から400人以上の青年が参加したデイリ郊外でのキャンプ(08年2月、スカウトメンバーの教育プログラムや気候変動をテーマにしたセミナー)を盛り込んだ集会(10年6月な

どを実施してきた。2012年11月にも、各地から多数の青年が参加できるようなキャンプの開催を計画している。

2012年には大統領選挙と国民議会選挙が実施される。これを機に、人びとの暮らし向きが改善され、繁栄がもたらされること、そして、東ティモールが腐敗していくことに歯止めをかけてほしいと思っている。

最後に、日本の皆さんへ。東ティモールの人びとの独立に向けた闘い、そして、占領時代から現在に至るまでのすべての心あたたかいサポートに対して、改めてお礼を伝えたい。これからも、私たち自身、そして次世代のよりよい未来のために、様々な形でお互いにサポートしあっていきましょう。

① <http://www.savethechildren.org/atf/cf/%7B9e2e2be-10ae-432c-9bdc-df91d2eb748%7DA%20LIFE%20FREE%20FROM%20HUNGER%20-%20TACKLING%20HILD%20MALNUTRITION.PDF>

② PERMASCOUT-TL (Permaculture Scout Timor-Leste) は、東ティモールで2007年1月27日に立ち上げたスカウト団体で、東ティモール・スカウト連盟(UNETL)、およびエール・ラモスさん自身が設立したNGOであるPERMATIL (Permaculture Timor-Leste) の活動の一部。

③ 現在はマヌファヒ県トゥリスカイ郡、パウカウ県ラカ郡、エルメラ県、アイレウ県にある。

コーヒープランテーションの風景。



が、首都のデシリだけでまわり、地方農民にとって重要な市場へのアクセスや道路インフラはまだまだ整備されていない。それゆえに、働き盛りの若い世代は村を離れ、仕事や勉強のために首都デシリや近くの町に出て行ってしまおう。残された親世代が国のために農業生産を続けているというのが現状だ。

### 政策の現状

すでに、社会基盤省、農業省、経済省などが存在するが、そのどこにも農業や食料安全保障などに関する明確な計画や政策がなく、省庁間での調整も圧倒的に不足している。政府予算の多くは、外国人アドバイザーに高給を支払うこと、海外からの農業資材・機材の輸入代金に消えている。AMP 政権は、観光商工省(MTC)を通じて、「POVU KUDA GOVERNUSOSA(人びとが種をまき、政府が買い上げる)」というプログラムを実施しているが、これは単なるスローガンにすぎない。地方で生きる人びとからは、不満や苦言が途切れることはない。政府は、人びとの食料安全よりも、外国のために白米の輸入にお金をつきこむことを

好んでいる。食料の95%が海外から輸入されているという実態が、自分たちの土地で育てた多種多様な旬の作物を食べる代わりに白米への人びとの依存をより強めている。このことが、栄養不良、土壌劣化、地方の市場の崩壊を招いている。

### 教育・医療は……

政府は教育に多額の予算をつぎ込んできた。いくつかの地方政府

はすでに無償教育、無償給食プログラムを実施しているが、未だに学校や設備、先生が不足している地方も存在する。また、給食で使われている食料(米や豆)のほとんどが海外からの輸入だ。

そして、何よりも問題なのは、教育システムにおいても明確な政策が政府内に存在していないことだ。現在のシステムは、若者をふるさどから引き離すためのものになる。例えば、農業高校や大学

の農学部で教えられていることは、各地域の現状を反映しておらず、学生たちの出身地の村で役立つ実践よりも、単なる理論ばかりだ。これが、人びとが受け継いできた伝統的な知識を弱体化させる原因となっている。両親たちは、子どもが村に戻り、学んだことを村で生かしてくれることを望んでいるにもかかわらず、学生の多くは、卒業後に、農業省の農業普及員や政府組織で働くことを望んでいる。



APLAが活動するエルメラ県のコーヒー産地で、Permatilの協力のもと、乾季でも農業ができる方法を学ぶワークショップを実施。



全国から集まった青年たちが気候変動について真剣に学び語り合った。

# 独立から10年、 今、私たちが感じていること。

独立からの10年を振り返り、学生、コーヒー生産者、活動家と、それぞれの立場から今思うことを話してもらいました。

## アレクサンドリーナ・デ・ロサ

Alexandrina de Rosa  
東ティモール国立大学・学生・23歳

### 独立後、教育分野での変化は大きいと思っています。

高校まで無償で教育を受けられるようになり、自分も今こうして大学で勉強できているし、トレーニングなどへのアクセス、インターネットを通じた情報へのアクセスが可能になったことも大きな変化です。

一方、変化がないのは経済分野だと感じています。雇用がないために、両親に学費など金銭的なサポートを頼みつつけなくてはいいませんが、両親は農民のため、私が大学に通う授業料を支払う余裕はなく、新学期ごとに叔父に授業料のサポートをお願いしています。叔父も一度に全額を払えるわけではないため、30ドルの授業料を支払うた

血縁主義のシステムを利用できる一握りの人々です。独立前の状況と現状を比べると、正直に言って昔の方がよかったです。



統領は、民衆(特に力の小さい人びと)

や貧しい人びと、学生などの生活に

ついて真剣に考えてほしいです。

めに、自分でもタバコを売ったり、パンをつくって売ったりして稼いだお金で、大学に行く乗り合いバスの料金やコピー代、授業料の足しなどに使っています。独立前の夢は、仕事を見つけて、自分で大学に通うことで、その実現は難しいと感じています。今の東ティモールで仕事を得ることのできる人は、

物価も安く、庶民にとっても生活しやすかったからです。もし1000ルピア(約10セント)約10ルピアがあれば、何か少しでも買えることができただけ、今は物価がとて高く、自分たちの手元にあるお金は何の価値ももたないように感じてしまうほどです。これから選出される新しい大

統領は、民衆(特に力の小さい人びと)や貧しい人びと、学生などの生活に

ついて真剣に考えてほしいです。

## ジュリオ・マテイラ

Julio Madeira  
エルメラ県・コーヒー農民・38歳



の10年間を振り返ると、インドネシアの占領中と独立後の変化を感じます。インドネシア占領期にはコーヒ

ーを買い付ける企業はNCBAのみでしたが、独立後には、コーヒー農民はティモール・コープ、エルサ・カフェ、ティモール・グロバル、オルター・トレード・ティモール社(ART)など、数多くの企業にアクセスできるようになりました。以前の自分の夢は、コーヒー農園の中にある慣習的な土地が我々のような農民の手に戻ることでしたが、残念ながら

現在までそれは実現していません。むしろ政府の意図は、外国企業を送り込んで、コーヒープランテーションを再度運営させることにあるようです。「独立」はしたものの夢見ていた状況とは程遠く、社会正義の実現のためにたたかいつづけていはいけないと思っています。日本人たちへのメッセージはたくさんあります。コーヒー生産地域(特にエルメラ県)でより

多くの生産が可能になるように、コーヒーを買い支えてほしいです。また、生活を保障するような持続可能な農業のシステムをつくりあげるために、コーヒー生産者や農業者、学生などが海外で学べる仕組みや、品質が保証されたコーヒーを生産する地域にできるように農民の子ども

たちが教育をうけるための奨学金をだしてもらえとうれしいです。近隣地域での小規模な産業をつくりだせないかとも考えています。海外から輸入したコーヒーを市場から減らしていくためにも、自分たちの無農薬のコーヒーを国内でもっと広めたいと思っています。

### 独立後の10年で、首都ティ

リで起こった一般的な変化は、車の交通量がとも増えたこと、何から何までがティリに集中していることです。また、市内には政府の建物が多く建設されましたが、その多くは中国政府からの財政援助によるものです。大統領府、外務省、そして東ティモール国防軍の事務所など。政府は、石油ガス基金のお金も依然として国内の開発には使用してないのが現状です。一方、市外のインフラについては、道路の整備を開始しているもの、その進捗はとて遅く、新しい橋が建設されても、大雨などの影響ですでに破壊されてしまったものもありま

活動家・インドネシア占領時代には、独立のために活動していた。1991年11月12日に起きたサンタ・クルス事件の犠牲者でもある

## ペドロ・デ・オリベイラ

Pedro de Oliveira



す。重油発電所からの送電がティリ、リキサ、パウカウの3県で始まりましたが、安定せず停電も起こっていると聞きます。経済や雇用については不満が大きいです。政府、NGO、企業などでの仕事に就いた人びとは、自身や家族の生活を支えることができているが、それは一握りです。会社を興して早くから事業を入札し、大きな利益を得ることで裕福になつていった議員、官僚、国家公務員などがいる一方で、小さな民は、

貧しいまま。物価は常にながらつづけていて、主食である米の価格が安定することはなく、食費や子どもたちの学校に関連する費用など、日々の生活を支えるために、道端でモノを売って暮らしたりしています。政治決定も、時として民衆の生活の現況は反映されておらず、例えば、土地に関する法律に関しては、議会の承認を得たものの、人びとの生活に価値を与えるものではないとして、多くの抗議の声があがりはじめています。この法律によって利益を得るのは、お金をもっている企業ばかりです。

個人的には、独立後の10年の間、自分と家族にとっていい方向への変化はありません。政府は、決して私たちのような犠牲者に特別な注意を払ってきませんでした。私自身は、学費を工面できず大学を卒業することはできませんでした。インドネシア軍に殴打されたところ未だに痛みを感じるため、力仕事などをするのは難しいと感じています。現在住んでいる家の状態もよくないし、友人のなかには

〈注〉1991年11月12日、ある学生活動家の埋葬のためにティリのサンタクルス墓地に約1000人が集まった。そこでは、11月12日に予定されていたポルトガル議員団の東ティモール訪問をインドネシア政府が拒否したことに対する抗議デモも同時に行われた。デモは平和的なものであったにもかかわらず、インドネシア国軍が突然自動小銃を乱射、無差別虐殺が起きた。この事件で500人以上の死者および「行方不明者」が出たとされる。

# 外国人被災者の「現住所」

佐藤信行／さとうのぶゆき

外国人被災者支援プロジェクト運営委員、在日韓国人問題研究所(RAIK)所長

## 「外国人被災者」7万5千人

2011年3月11日、東日本大震災で被災した青森・岩手・宮城・福島・茨城の5県には、約9万人の在日外国人が暮らしていた。そのうち、災害救助法が適用された市・町・村に住む外国人は7万5281人で、その内訳は中国2万7000人、韓国・朝鮮1万2000人、フィリピン9000人、ブラジル7000人、タイ4000人……と続く。外国人の死者は韓国・朝鮮14人、中国10人、フィリピン4人、米国2人、パキスタン1人、カナダ1人であり、「外国人の行方不明者数は警察庁が集計しないため不明」だという(中日新聞)2011年10月17日。



2011年10月2日栗原国際交流協会主催芋煮会。宮城県栗原市に嫁いできた韓国・中国・フィリピンから来たご婦人方とご家族70人程が参加。

地震・津波・原発崩壊から1年たった現在でも、外国人被災者に関する情報は断片的なものでしかない。それは、外国人被災者の居住地が5県にわたり、また154の市・区・町・村のあまりにも広範囲に及ぶこと、彼ら彼女らのほとんどがコミュニティを形成することなく地域社会の中で孤立して生活してきたこと、すなわち日本社会において周縁化されてきたからである。

## 被災した移住女性の「現住所」

1990年代以降、日本人との国際結婚で、東北の農村・漁村へ多くの女性たちが韓国、中国、フィリピンから移住してきた。外国人登録者数の男女比をみると、女性100人に対して男性は、1990年では岩手県87、宮城県102、福島県87であったが、20年後の2010年には岩手県34、宮城県69、福島県47となっていて、女性の割合が圧倒している。それは、国際結婚による移住女性の急増が理由だと考えられる。

私たち「外キ協」と「東北ヘルプ」は2011年9月、「外国人被災者支援プロジェクト」を立ち上げ、まず彼女たちに対する調査から始めた。その2000人

余りの調査票から、ごく一部を抜粋してみる。

◆ 韓国人Aさん・66歳。35年在住。震災にて店が損壊し、4月に閉店。夫・日本人(76歳)も高齢であり、店の再建は不可能。

◆ 韓国人Bさん・48歳。夫・日本人(55歳)。家の天井が崩落、家財すべて損壊、家屋が傾斜するが、「一部損壊」認定。養鶏場の鶏が全羽死亡。

◆ 韓国人Cさん・57歳。在住8年。夫・日本人(63歳)は震災後、無職に。自宅のローンの支払いも困難に。震災後の心労で体重が15キロ減少し、病気になるってしまったが、入院もできず、自殺を図る。

◆ 韓国人Dさん・58歳。在住9年。夫・日本人は震災後に心労と風邪から病気になる、半年入院後、9月に死去。夫の親族との財産協議が未だできていない。

◆ 中国人Aさん・37歳。津波で家が全壊。仮設住宅で夫・日本人(48歳)、子ども2人(4歳と2歳)と生活。夫は現地に雇用がないため、仙台に通いで仕事。自分も家計を支えるため、子どもを幼稚園に預け、地元の民宿でアルバイト中。中国人Bさん・在住14年。津波で家が全壊。夫・日本人(60歳)が津波で死去。仮設住宅で子ども2人(小学6年と3年)と暮らす。夫が保険等にも未加入であったため義援金のみ。相続する財産もない。地元の民宿でアルバイト中。

ゲバラ曰く「こんな社会主義じゃない……」。

上海に限らず巨大な中国のすべての土地・資源は人民には分配されず、共産党が管理している。日本円で200万円はする家の購入費はすべて党の財源になるのだから、それこそ「世界一金持ちの党」というわけだ。連日こうした光景を目の前にして私たちは混乱しまくった。

12億の人口・土地・資源を「共産党政府」という「巨大会社」が統制する世界。それは、労働者が主役の社会主義や競争のある資本主義でもない、わけのわからない姿だった。訪問先で、あえて人びとにめざすものは? と質問すると、  
「Making Money(金儲け)」「アメリカを追い越し、世界一になる」という話を、案内にたった共産党幹部が堂々と語ることに、また混乱……。

## 農村出身者・出稼ぎ労働者たちは……

最後の日にやっと人間と生活の匂いのある場所に行くことができた。巨大ビル群がひしめく市内から1時間ほど離れると、まさにゲットー化した猥雑な町に出くわす。農村からの出稼ぎ労働者の居住区だ。この町で初めて、路上で遊ぶ子どもたち、そこらへんをうろつく犬やアヒル、狭い家屋の外で炭やまきを使って料理するおばちゃんたちに出会った。思わずブラジルの農民が「ワー、リオのハベラ(都市貧困地区と同じだ)」と大喜び。フィリピンの場合、都市貧困層の地域は、

◆ フィリピン人Aさん・39歳。在住14年。震災後に夫・日本人(60歳)が急病で死去。夫の借金があり、財産をすべて処分。わずかなお金と、子ども4人(小学6年・3年・2歳・1歳)が残される。ほとんど雇用機会がなく、無職。

## 7万5千人の「協働者」が必要

私たちは今、福島県、岩手県へと調査を広げるとともに、福島県下のフィリピン人女性グループの自立・就労活動へのサポート、宮城県下の韓国人移住女性の就労支援の一環としての日本語教室の開設など、調査と支援の輪を広げるとともに、2012年4月、仙台に「外国人被災者支援センター」を設置する。なぜなら、孤立して困難な状況に置かれている外国人被災者7万5000人の一人ひとりの安否を確認して励まし、その生活が再建されるためには、7万5000人の「協働者」が必要であるからだ。震災復興とは、もとの生活と地域社会が「多民族・多文化共生社会」へと、再生されなければならない。■

〔注〕外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会(外キ協) <http://gaikyoi.jp>  
仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク(東北ヘルプ) <http://tohokuhelp.com/>  
\* 外国人被災者支援プロジェクトの最新情報は、左記のホームページを参照してください。  
<http://gaikyoi.jp/>

一ヶ所で平均200家族くらいだが、さすが中国は規模が違う。この町の人口は5万人。全員が農村出身者で建設労働、繊維工場・家政婦など様々な職種の人たちで、単身もしくは家族を呼び寄せて住みつき、なかには10年以上土地元に帰らず上海で仕事をしている人もいる。しかし、農村出身者は都市の居住権を持ってない。長期に農村を離れた人たちは、農村の居住権さえ奪われ「浮遊」階層にならざるをえない。ウェン先生から、全国でその数は2億人と聞き、私たちはまたどっと目が眩んだ。

## 混乱の本質

フィリピンもそうだったように、かつて毛沢東の農村革命に大いに勇気づけられ、変革をめざした中南米の仲間たちは、連日バスの中で大議論を展開していた。「どこまで、誰のために金儲けを続けるのか? 出稼ぎ労働者や農村資源の収奪を見ていると、中国政府は外に植民地を作らず、自国の農村を植民地にしていくかのようだ。しかし同時に中国は、特に中南米やアフリカにおいても鉱山開発やバイオ燃料用穀物栽培で、土地や資源を奪っている。進歩的な学者や学生さえ、中国の経済発展が、世界のいたるところで人びとの犠牲の上に成り立っているということが分かっていない」。ブラジルやエクアドル農民の当事者の視点を聞いて、私たちの混乱は少し整理された。■

# 上海で大混乱

大橋成子／おおはし・せいこ  
APLAフィリピン担当デスク

長の年の友人である中国の農業問題の大家・北京人民大学のウェン・テジュン先生と香港の嶺南大学のラオ・キンチ先生の招待を受け、「持続可能な世界のための南・南交流」という国際会議に参加した。会議参加者の顔ぶれは実に様々で、アジア、中南米、アフリカ、ヨーロッパ、米国とほぼ全世界から70名近くの学者や社会運動に携わる人びとが集まった。

会議に先駆けて6日間の中国各地の視察があり、上海地域を訪問した。同行者のほとんどが中南米出身。チェ・ゲバラの長女で、現在キューバで女医として健康保健問題に関わっているアレイダをはじめ、エクアドルの鉱山開発(中国資本が参入)に反対する先住民、メキシコのチアパス州サパティスタの闘士だった社会学者、世界的な農民運動を組織しているヴァイア・カンベンシーナの事務局を務めるブラジルの農民などなど。

## 何でも世界一

上海市を中心とする中国東海岸は早くから開発と工業化が進んだところで、まさに「白でも黒でも猫なら同じ」経済を押し進めてきた地域だ。市内にはこれ



上海視察グループのメンバーの面々。

でもかといわんばかりに「世界一高い」「世界一広い」と喧伝する摩天楼がそびえたち、中国のウォール街と呼ばれる一角では、米国やヨーロッパ留学組の共産党幹部の子弟たちが、見事な英語を駆使し、今や若者の誰もが憧れる「エグゼクティブ」ムラとなっている。

訪問先の極めつけは中国で最も成功したと評価されている華西村。50年前の貧村を、造船業を中心に「社会主義建設」した「世界一の村」という看板がいたるところに掲げられている。現在は自動車・縫製・ホテル産業、さらにヘリコプター観光まであり、ディズニールランドもどきの公園がいくつもあつた。中心に建てられたホテルは80階。その67階に「世界一」を象徴する、1トンの純金で作られた「黄金の牛」が展示されているのを見学した時、思わず苦笑いしたアレイダ・

03

# 仙人の雑読・濫読 04

秋山真兄 / あきやま・なおえ  
APLA共同代表



『高みの見物』北杜夫 (新潮社)

その彼女たちも小さい時は、ネズミが可愛い主人公である童話が大好きだったはずだ。双子の野ネズミが主人公の中川李枝子作・山脇百合子絵の『ぐりとぐら』シリーズ(福音館)は2000万部以上発行され、9カ国語に翻訳されて国内外で超ベストセラーになっている。Yさんの小さな時には未だ発刊されてはいなかったが、それでも孫に微笑みながら読み聞かせているのではなからうか。他にもネズミが主人公の童話はかなりある。米国アニメの『トムとジェリー』も誰もが知っているのだら

う。普通の童話とはとてもいえない残酷な話、暗い話、辛らつな話で埋まっている『グリム童話』でも、ネズミを生涯の敵にしなくてはならないような話は見当たらない。どうして、人は大人になると、親しみを感じていたネズミを恐れ毛嫌いするようになるのだろうか。私は解せない。ヘビが主人公となる小説や童話は、私はほとんど知らない。聖書の失楽園物語でイブを誘惑してからは悪者として登場することはあっても、ヘビを愛すべき主人公として登場させることはないのかもしれない。もしあればぜひ教えていただきたい。ゴキブリはどうだろうか。イソップ、グリム、アンデルセン、そして日本の童話であれ、ゴキブリは主人公であることはもとより、登場することさえないのである。最近亡くなった北杜夫の『高みの見物』(1972年、新潮社)である。内容は読んでみてのお楽しみ。新潮文庫の解説は「ゴキブリ国際連合日本管区長ゴキブリオリス」こと、北に先だって亡くなった井上ひさしの怪文である。表紙デザインは哲学者で登山家の串田孫一。ゴキブリ冥利に尽きるといふものだ。

01

# 水俣と日本の今 その4

原田利恵 / はらだ・りえ  
環境省国立水俣病総合研究センター 研究員



「この人たち」の説明をする浩さん。(2012年3月19日藤節子撮影)

〈注〉水俣で「じゃ、おいでよ」という意味。

〈注〉「この人たちの」は、摘み取る「刈り落とす」の意味。

地域興しの活動で注目を集める「あばあこんね」代表の天野浩さん(1975年生)は、標高約600mの石飛地区「天野製茶園」の3代目です。祖父が1949年に入植。父の茂さんが71年後を継ぎ、73年から減農薬に取り組み、79年に完全無農薬を実現しました。茂さんが「農薬をかけないと楽になると思った」と語る背景には、リウマチで農作業ができなくなった妻政子さんの存在があります。農薬散布には人手とお金が必要。ならば農薬を撒かないですむように、土壌改良をし、種から苗木を育て、雑草や虫と共生できる強い茶畑にしました。水俣病に対する思いもあります。相思社のインタビュアーに茂さんは、「水俣に住んでいると水俣病とは離れられ

お茶に寄り添う  
ながね。水俣病は食べ物からじゃ、自分も口に入るものを作るものとして責任があつた」と答えています。幼い時から母の代わり家事をし、20歳から家業に携わっている浩さんは、慈しんで育てた茶畑を案内してくれました。「この人たちは、いつも人間に摘まれてストレスを感じてるんです。だから普段はそっとしておいてやらんと。とくに芽が出てから3年間は絶対触ったらダメです。触るとビクッと成長が止まるんです。この道路側の人たちはもって、ストレスを受けて育ちが悪いけど、この人たちがおるけん、中側の人たちがよく育つとです」。

「この人たちが」の説明をする浩さん。 (2012年3月19日藤節子撮影)

04

# Have you ever seen the Cinema? あの映画を見たかい? 10

重政栄一郎 / しげまさ・えいいちろう  
エディトリアル・デザイナー



『ザ・コーヴ』(2009年、米国)  
【監督】ルイ・シホヨス 【出演】リック・オパリー、ルイ・シホヨス

和歌山県太地町で行われるイルカ漁の実態を告発するドキュメンタリー。その入江(サウヴ)で行われる衝撃的な秘密を特別編制の撮影隊がサスペンス映画さながらに暴く……。拙コラム筆者は、日本生まれ日本育ちの日本人である。たいへん不愉快な思いを持ってこの映画を観終えた。この映画は太地町のイルカ漁を「野蛮」で「残酷」な「悪事」と決めつけ、それを支える日本社会の後進性を槍玉に挙げる。イルカ漁に関わりたくない筆者も憤りを感じるのである。実際に姿を映し出され「日本版では顔にはかし処理、「悪人」「野蛮人」と糾弾される太地町の関係者たちの怒りと悲しみはいかばかりか……。事実誤認、データ捏造、論理のすり替え、やらせ演出……、ツッコミどころは満載だが、何より不快なのはこの映画制作者側の人たちの傲慢さだ。彼らは自らの「正義」「善」「無垢」を何ら疑うことなく、その主義

主張に反する者を一方的に攻撃する。そこには明らかな差別と偏見がある。このような差別と偏見を以て他者を貶めた映画は数多ある。かつて西部劇の多くで描かれた「インディアン」はその典型だ。開拓者たちを突如として襲撃する「インディアン」は「未開」「野蛮」、そして開拓の行く手を阻む「邪悪」の象徴であった。現在でも人種や民族、文化、宗教、性別など様々な「違い」に対する無知や不寛容から差別・偏見が生み出される例は後を絶たない。それは、往々にして「正義感」や「善意」を源泉としているから厄介だ。いかなる活動も、主張も、他者との関係性と自らの立脚点を常に顧みる謙虚さを忘れれば、そこにあるのは独善だ。筆者が感じた憤りと反発は、ナショナリズムに根ざす。行き過ぎたナショナリズムは虚心坦懐な思考を鈍らせ、人を視野狭窄にする。ナショナリズムも差別・偏見を生み出す源泉のひとつだ。イルカ・鯨漁の是非は、ナショナリズムの呪縛を離れ、様々な観点から議論が必要だと思う。(この映画では、鯨肉食の危険・水銀汚染を主張するために水俣病を持ち出し、水俣病患者の映像が使われている。これは筋違いのご都合主義で、水俣病患者への冒瀆でもあると思う。)

02

# マイストーリー ジャパン 日本に住む在日外国人たち 第四回

マリリン・西本マルドニアさん / Marlonia Nishino  
聞き手: 赤石優衣 (APLA 編集部)



ドナさんの自宅にて。

今年で設立10年目を迎えた「カラカサン 移住女性のためのエンパワメントセンター」共同代表のひとりである西本マルドニアさん(通称ドナ)さんは、笑顔が素敵で元氣なフィリピン女性だ。1982年に来日して以来、必死に働き、3人の子どもを立派に育て上げ、今はカラカサンの活動に勤しんでいる。カラカサンでは、移住女性やその子どもたちを対象にした相談や家庭訪問、暴力被害を受けた女性へのフォローアップケア、生活が大変な家庭への食糧配布支援などを行なっている。仕事、そして家庭生活でも辛く大変な思いをしてきたドナさんは、現在多くの移住女性が抱えている問題と、彼女たちの気持ちをわかることができるといふ。ドナさんが移住

した当時には、このようなNGOもなければ、話を聞いてくれる相手もいなかった。同じような境遇にいる女性のために活動したいと、多くの移住女性たちの相談相手になっている。彼女たちが少しづつ元氣になっていく姿を見ることが嬉しく、やりがいになっているという。「絶対にひとりでは苦しませるようなことはしない、電話に出なかったら出るまでかけ続けて話をする、困っている人がいたら助けてあげたい」とドナさんは語る。

里親として子どもたちを自宅で数カ月引き受けて面倒を見たこともある。カラカサンの事務所、教会、ドナさんの家にはいつも子どもたちが集まりにぎやかだ。子どもたちみんながドナさんを第二の母と慕っているように思えた。そんなドナさん自身も、「一緒にいる子どもを私の子どもと勘違いする人がいるのよ」と楽しそうに話す。時には叱ることもあるが、手作りのおやつを囲みながら、いつも子どもたちの話を親身に聞いてあげているドナさんの笑顔をつくっているのも、彼女の周りには仲間や子どもたちなのだろう。「死ぬまでカラカサンで活動し続ける!」このドナさんの言葉で、今回のコラムを終えたいと思う。

今回のお題

## ミトラティー (Mitra Tea)

レポーター  
大村勘斗 / おおむら・かんと  
株式会社リタレーティング



ウバ茶園の様子。



ミトラティーウバのウバとはスリランカの山岳地帯南東部の地域名のこと。標高1500〜2000mに位置する紅茶の産地として世界的にも有名な地域です。コロナボより車で5時間ほど山を登って行くと、澄んだ空気と彩り豊かな花と自然に囲まれた茶園に到着です。茶園は山の傾斜面に沿って一面に茶の木が広がっています。

### ミトラティーの生産者たちと生産方法

摘み手は女性が中心で(すべて手摘み、一日ひとりあたり最低15kgを摘み、それ以上摘んだ分は出来高制で自身の報酬に上乘せられます。朝6時から始まる農作業、テキパキと作業されている様子を撮るために摘み手の女性にカメラを向けた時の、彼女の屈託のない笑顔が特に印象的でした。私の持っていた厳しい労働のイメージとは全く違うものでした。茶園で働かされている方々の住まいへ伺った際には、子どもたちに質問してみました。「大きくなったら何

になりたいの？」即答で、「ドクター!」「ナース!」目を輝かせて答える姿は希望に満ちて生き生きとしていました。ミトラティーの生産者たちは、オーガニック(有機農法)、フェアトレード(FLO)の認証を受けた茶園で働いています。残念ながらこのような条件の茶園はまだ少なく、一般的には慣行農法、非認証の茶園がほとんどです(有機認証を受けた茶園は全体の約0.3%)。実際に茶園の取り組み方法を見ていると、この茶園の方々は社会保障面でも優遇されていること、そして何よりも農業や殺虫剤、除草剤を使用しない有機農法によって、安心して農作業に取り組める様子がうかがえました。また、化学肥料に頼らない(落ち葉やハーブの堆肥を使用)自然循環型の農法により土壌にも負荷をかけないことは、生産者だけでなく、消費者の健康、そして将来の次世代に引き継がれる環境の保全という意味でも大変意義深いことです。とはいえ、慣行農法に比べ運営コストがかさむことも切実な課題です。また通常の



生産者の女性たち。

競り市オークションを通してしまえば、慣行農法とも区別なく安価に取引されてしまうのが現状です。

### これからの時代の選択

この度、20年以上にわたって取り組みをされてきたスリランカ人の茶園オーナーにも直接お話を伺うことができました。「選択の問題です。かつてのタバコを吸うことが当たり前だった時代から、今では吸わないことが世界の常識、主流になっている。食物に対する安全性についても人びとの関心が高まる傾向は続いている。人や環境の健全性を考えた場合、自然に順応し、薬に頼らないで栽培する農法がよいのかどうかは、自ずと答えは出てくるでしょう」と、確信を持った話し方に私も共鳴しました。

ミトラティー(Mitra Tea)ウバ茶とアールグレイはAPLA SHOPでも取り扱っています。  
<http://www.aplashop.jp>



茶摘の風景。



いわゆる“貧富の差”の激しい国である。街中には高層ビルが立ち並び、高級車が気炎を上げ、デパートには高級品が溢れている。

そんななかで、それらとは無縁な人びとが暮らしている。日々彼らは働き、幾ばくかのお金を稼いで暮らしている。しかし、彼らは絶望してはいないし、決して笑顔を忘れない。彼らを見ていると“貧富の差”などという言葉が安易な、薄っぺらいもの感じられる。彼らは幸福に違いないなど言うつもりはない。しかし恐らく不幸なわけでもない。個々人にピントを合わせると「多様な生き方を選んでいる」ように見えてくるのだ。道端で火を使い、改造屋台を引き、当然のように路上で食べ、喋り、笑う。

カメラを掲げて市場へ通う。タイ語も碌に喋らず、ヘラヘラ笑いながらレンズを向ける日本人にも、彼らは優しい。

- 1 — アーリー地区 トクトックドライバー  
主に観光地でよく見る自動三輪車「トクトック」。料金は行き先に応じて事前交渉。(2012年1月16日撮影)
- 2 — アーリー地区 路上マガジン店  
これも生活の糧。売るものさえあればいつでもどこでも。(2012年1月16日撮影)
- 3 — クロントゥーイ市場 市場で豚肉を売る女性  
タイの人たちは豚の頭から脚の先まですべて食べる。(2011年10月24日撮影)
- 4 — プラカノン市場 床屋の店主  
カメラ片手に眺めていたら「入って撮る?」と扉を開けてくれた。(2012年2月3日撮影)
- 5 — プラカノン市場 ふくろ茸を売る女性  
ふくろ茸はタイ料理に欠かせない。女性のレンズを見据える眼が印象的だった。手元は休みなく動く。(2012年2月3日撮影)

このコーナーでは皆様の写真を募集しています。

募集内容○アジアを旅した写真5枚程度(日本も含まず) 詳しくはAPLA/あぶら事務局(TEL:03-5273-8160)までお問い合わせください。皆様からの応募をお待ちしております!

編集後記

世界中がひとつの市場となって勝ち負けを競うグローバル化の時代。国民国家の形成、国づくりは果たして可能なか。東ティモールの独立10年の歴史は、そんな疑問を突き付けている。これはこの国の為政者や民衆だけの問題ではない、私たち自身につきつけられている問題でもある。私自身が関わる反TPP運動とも重ね合わせて、そんなことを考えた。(大野)

特集では東ティモールの今をお伝えしましたが、そこから見えてくるのが、私たちの暮らしにも当てはまるような気がします。基本的な生活基盤はまったく違いますが、人びとがさらされている現実や問題の本質は、世界的に同じことがいえるのではないかと。そして、TOPICで語られている全く違うふたつの内容も、同じところに帰結するような……、そんなことを感じる号となりました。(吉澤)

今回から新しく編集担当に加わりました。……が、入稿を見届けずに海外出張となりました。実は、この文章も出張先の東ティモールで書いております。今号の特集では、この5月で独立(主権回復)から10年を迎える東ティモールを取り上げ、市井の人びとの声を集めました。大統領選挙の決選投票日にはディリにいる予定なので、どこかでご報告したいと思っております。(野川)

ハリナ HALINA

2012年 vol.02-no.16  
2012年05月1日発行

【編集長】  
大野和興

【編集者】  
吉澤真満子、野川未央

【表紙写真】  
長倉徳生

【デザイン・制作】  
十年舎

【編集・発行】  
特定非営利活動法人 APLA  
(APLA/あふら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)

〒169-0072  
東京都新宿区大久保2-4-15  
サンライズ新宿3F  
tel. 03-5273-8160  
fax. 03-5273-8667  
e-mail info@apla.jp  
URL http://www.apla.jp

【印刷】  
株式会社セイズ

【事務局だより】

事務局の動き(2012年3月～4月)	
1月 22日～28日	「脱原発への道」ドイツツアー(呼びかけ:みどりの未来、企画:㈱マイテック社)に、共同代表の足田が参加しました。※前号記載漏れ
2月 9日～15日	恵泉女学園大学フィールドスタディーツアー(ネグロス)に大橋が同行しました。※前号記載漏れ
3月 8日	「福島農家の“今”に触れる～福島視察・全国集会事前勉強会」を日本国際ボランティアセンター(JVC)とアジア太平洋資料センター(PARC)と共催しました。
3月 9日	在日東ティモール大使館主催レセプションに吉澤・野川が参加しました。
3月 10日、11日	アースガーデン“灯”に出店しました。
3月 13日	緊急市民国際シンポ「やっぱりTPPでは生きられない！」にTPPに反対する人びとの運動で参加し、APLAも協力しました。
3月 17日	「【料理教室】フィリピン・お菓子作りから見えるつながり」をインターンの藤原さんが企画し、開催しました。
3月 24日	福島県有機農業ネットワークふくしま集会実行委員会主催「福島視察・全国集会」に足田・吉澤が参加しました。
4月 4日	「TPPに反対する運動を進めるための円卓会議」に秋山が参加しました。
4月 7日	「福島百年未来塾」第1回を開催しました。
4月 21日、22日	アースター東京2012に、ATJと共同で出店しました。
4月 27日	ドキュメンタリー映画『シェーナウの想い～自然エネルギー社会を子どもたちに～』上映&「脱原発への道」ツアー報告会を開催しました。
4月 28日	APLA理事会開催。

事務局からお知らせ

**ホームページが新しくなりました!**  
4月よりAPLAのホームページが新しくなりました。リニューアルに合わせてAPLAのfacebookも開設。「あぶら事務局だより」として事務局の日々の出来事などをお伝えします。ぜひ、のぞいてみてください。



**以下の呼びかけに賛同・参加しました。**  
●原子力資機材の輸出及び公的信用の付与に際して独立した審査プロセスの確立を求める緊急声明【賛同】  
●福島県有機農業ネットワークふくしま集会実行委員会主催「福島視察・全国集会」【賛同】

**フィリピン・ネグロス東州地震被災者支援にご協力ありがとうございます。**  
募金は4月末まで受け付けました。最終合計金額はまた後日ご報告いたします。  
■2012年3月31日までの募金額: 1,016,000円

**「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へ引き続きご協力をお願いいたします。**  
■2011年度の受付額(2011年11月～2012年3月まで): 789,883円  
福島の保育園・幼稚園への配達状況は、ホームページでご確認いただけます。  
http://www.apla.jp/bnn\_bokin/log.html

**APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。**  
まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(事務局までご連絡ください。info@apla.jp)

From Negros, Philippines [ネグロスより]

カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC) 3期生候補の「きびしい?」面接試験が終わりました!

KFRCのスタッフは現在8名。なかでも、1期・2期生出身のジョネル、エムエム、レネーは、研修後も農場に残る決意をし、農場長カルロスとともに、養豚・耕作・農場運営を一手に引き受けている。その「先輩」たちによる3期生候補の面接試験が3月はじめに行われた。今年7月で3年目を迎える農場の体制もようやく確立し、3期生を受け入れるための条件が揃ったからだ。

3.11 APLAの仲間もキャンドルナイト

互恵のためのアジア民衆基金(APF)会長の藤田和芳さんからの呼びかけで、アジアの仲間たちも2012年3月11日に、東日本大震災大震災への追悼の気持ちを込めてキャンドルを灯してください。

【フィリピンより】  
カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC) 呼びかけにすぐ反応してくれたKFRC理事長のアルフレッドさん。2011年3月11日に日本で何が起こったかを研修生たちに話してく

た。追悼の気持ちを込めてキャンドルを灯してください。

ら代筆までしてやった。4名いた候補生のうち、2人は「親に言われてなんとなく来てしまった」などと言ったものだから、即刻不合格。合格者は、ジョマリ・デラクルス(32歳・サンフランシスコ出身)とジョナ・ベントウラ(24歳・バリス出身)に決定した。ジョマリは無口だが、朝か

ら晩まで休むことなく畑仕事に精を出す。耕作担当のレネーの相棒になった。1期生のレムレムが推薦し、将来、サンフランシスコで一緒に農業をする約束をしている。ジョナンは、最近結成されたバリスのバランゴン生産者協会(BIFBA)とオルター・トレード社(ATC)が推薦し、将

たそうです。真剣に聞き入る研修生とスタッフたち。今度、この感想を聞いてみたいと思います。

【フィリピンより】  
オルター・トレード社(ATC) 2012年2月6日、マグニチュード6.9の地震がネグロス東州を襲いました。かつて日本ネグロス・キャンペーン委員会(CNC)が緊急支援に入った地域で、現在はバランゴンバナナを出荷しているホマイホマイ村も大きな被害にあいました。緊急支援に入ったATCと村の被災者たちが、ネグロスの地震と東日本大震災の被害者へ追悼の気



ネグロス東州の地震の被災者たちもキャンドルを灯した。

持ちを込めて、キャンドルを灯しました。

【インドネシアより】  
オルター・トレード・インドネシア社(ATINA) 夜まで残っていた加工員の皆さんが集いキャンドルナイトを開催。詩の朗読やギター演奏と一緒に歌を歌って時を

来地域で養豚と堆肥作り、野菜生産など「バナナ産地の多様な農業を担う若者代表」という期待を背負って、現在養豚を中心に連日特訓を受けている。農場は新しい若者が加わってさらに賑やかになった。1年後の姿が楽しみだ。APLAフィリピンデスク・大橋成子

過ぎました。暗闇のなか、東日本大震災の犠牲者に思いをはせるとともに、それぞれが自分の人生を振り返るひと時に。自然災害を前に人間は、謙虚になり、人にも自然にもやさしくなり、愛と尊敬をもって生きていこう、と確認しあったそうです。

【東ティモールより】  
オルター・トレード・ティモール社(ATI)と学生たち ATTとKSIのスタッフとその家族、東ティモール大学の学生たち35人、そして2人の大使館日本人職員が日本大使館の前に集まり、キャンドルナイトを開催しました。東ティモールから日本へ心のこもったメッセージが届くようにと、ハート型にろうそくを灯しました。集まった全員で東日本大震災の犠牲者への追悼の祈りをささげ、その後、亡くなられた方々の冥福を祈るため海に花を流しました。

【注】APFの会員団体のひとつであるNGO、東ティモールにおける養豚事業推進事業などをコーディネートしている。